大阪インターナショナルチャーチ：　　ブルース・アレン牧師
ローマ人への手紙 13 章 10 節-14 章 17 節　New American Standard Bible (NASB1995)

2024/05/19

説教題：義認: クリスチャンの自由と義務

OIC の皆さん、お早うございます。

義認とは、イエスが私たちの永遠の赦しを買うために十字架上で死なれたことに基づいて、私たちはもはや罪がなく、義とされるという神の宣言です。 今日、私たちは、信仰によって義とされたクリスチャンが、「罪深い」世の中で「敬虔的」な人生を送るために恐れから解放されることをパウロがどのように描写しているかを詳しく見ていきますが、同時に、パウロのローマ人への手紙は、これらの聖書の箇所で、「自由」とはクリスチャン仲間の良心的な選択を守るという重い責任が伴うことを強調しています。
使徒パウロがローマ人人への手紙の 13 と 14 章を引用した、私の 5 月 5 日と 12 日の説教から、その関係と背景を見て見たいと思います。私たちは、地方教会での人間関係に必要な信仰を大切に考えています。 この信仰を持つために祈りの勝利があります。 世に打ち勝ち、肉に打ち勝ち、悪魔に打ち勝つ信仰を持つための祈りにおける勝利は、私たちの地方教会における人間関係の勝利に現れるのです。　５月 5 日の説教題である、信仰―祈りの勝利、それはヨハネ第一の手紙とマタイの福音書から聖書個所を引用しました。それは、4 月 28 日で挙げたローマ 12 章 10 - 11 節と一致しています。　**（ローマ 12 章 10-11 節）：「** 10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。11 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」
私の 5 月 5 日のメッセージを引用しましょう：　「兄弟愛は自然なものではないが、神は自らを生けるいけにえとして差し出したクリスチャンのうちに、それを実現されます。　生けるいけにえとして自らをささげることは、ローマ人への手紙第 12 章で教えられました。 5 月 5 日のメッセージで、私は使徒ヨハネがイエスから教えられたように、「愛」についての教えの意味を引き出そうとしました。 主ご自身が**(マタイ 22 章 37 - 40 節)**で示された命令は、次のようなものでした。：「37 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』38 これがたいせつな第一の戒めです。39『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」
私は、この命令を先週の 5 月 12 日に言及しました。
これらの前回の 4 つの説教題は：

4 月 28 日　　義認： 献身的な奉仕への導き

5 月 5 日　　信仰-祈りこそ勝利

５月 12 日　　義認： 世にあって敬虔に生きることへ導く

５月 19 日　　義認 ：クリスチャンの自由と義務

これらのメッセージには、聖霊によるこれらのタイトル以外にも多くの指示がありました。しかし、私は、一節の釈義を避けることなく、主がこの牧師に、イエスから OIC への特別なメッセージに焦点を当てるように導かれたと信じています。 このメッセージは、主イエスとクリスチャンの 「個人的な 」関係が溢れるとき、キリストの体、特に地方教会におけるより良い愛の関係につながるという事実に関わるものです。　また、クリスチャンとの関係をより緊密なものにすることで、私たちはイエスにより近く歩むことができるという点で、これは双方向に働きます。 地方教会は、イエスの約束 *「わたしの教会を建てる 」*を果たすために、「神が最も力を発揮される 」場所なのです。地域教会は、クリスチャンが対立と祈りを通して、また互いに手を取り合って成長する場所です。 神の恵みによって、私が注目したのは、イエスの子供たちに互いに愛し合うことを命じたイエスの心でした。
イエスがお与えになった(ヨハネ 13 章 34-35 節/Mounce)にある新しい戒めです。 :「 34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」
OIC のために、この焦点を保っていきましょう。しかし、イエスの生涯と教えは、神の子どもたちがその愛をクリスチャン仲間だけに限定すべきではないことを明らかにしています。

ローマ人への手紙の続きです。私たちは、使徒パウロが多くの聖書の文章を一行で要約し、律法の霊は LOVE であると述べているのを読みました。(ローマ 13 章 10 節) :「 10 愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。」

パウロは、ある意味、この簡単な指示と戒めを使って、新約聖書の愛に関するすべての教え、特にローマ人への手紙の教えを要約しているように思えます。

(ローマ 13 章 11 節/MOUNCE) :「11 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」私は、ギリシャ語 (MOUNCE) からの 「And live this way 」の方が、「Do this」 (NASB/1995) よりも好です。「*And live this way* そしてこのように生きる」は、ローマ人への手紙第 13 章と第 14 章にある使徒パウロの実践的な適用が示している道です。 これらの教えは、イエスの犠牲によって罪と律法から解放されたクリスチャンにとって、日常生活における箴言のようなものである。 「*this way* このように生きる」クリスチャンは、律法の精神を全うするのです！

眠りから覚めよ (11 節) . . . これは、霊的な警戒を促す使徒の励ましであり、励ましであり、説得です。 使徒ペテロが(1 ペテロ　5 章 8 節/MOUNCE)で信者に暗示したように、キリストに仕える兵士としてのクリスチャンにとって、霊的な警戒は重要です。:「8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽く

すべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」
しかし、イエスはまた、時の終わりまで「万物」を支配する神への信仰がなければ、また、時の終わりにおける信者への約束への信仰がなければ、キリスト教は崩壊してしまうことを忘れてはならないと、信者たちに警告されました。 終末の時代における聖書の研究を表す聖書の言葉は「終末論」です。　終末の時に対する警戒を忘れてはいけません。 この 5 人の愚かなおとめのように、イエスによる終末の教えを忘れてしまうことは、悪魔に対して警戒を怠ること以上に危険なことなのです。　　イエスの再臨に関するこのような霊的な眠りは、救い主との接触を失い、救い主を偶像や偽りの神に置き換えてしまうことにつながります。**(マタイ 24 章 3 節)** で弟子たちに尋ねた後のイエスの教えの中に、このことがはっきりと示されています。 :「3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう。」　一世紀のコミュニケーターたちは、もちろんイエスがその最たるものであったが、たとえ話が当時のユダヤ人やその他の文化圏の人々の心や心を打つことを知っていました。 そこでイエスは、**(マタイ 25 章 1-13 節)**の「十人のおとめのたとえ」で、彼らの大きな疑問に答えています :「1 そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声がした。7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。11 そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください。』と言った。12 しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』と言った。13 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」
イエスは、もしクリスチャンが愚かで、イエスの予測不可能な、それゆえに差し迫った再臨を見守り、予期する「警戒態勢」にいないならば、天国を逃すことが起こりうると言っています。イエスの言葉を心に留めないクリスチャンは、地上での生活のためだけに生きるクリスチャンになってしまいます。 彼らは逆戻りするのです！ 吼える獅子、悪魔は、彼らが一時的な生活に集中しているのを見るでしょう。 彼に対する戦いのラッパが鳴り止むまで、忍耐を持たないように彼らを落胆させるだろう！ また、「ランプに油を入れる 」ことと 「聖霊を持つ 」こととは明らかに類似していますが、イエスの再臨を積極的に見守ることを怠ると、「信仰 」から後戻りし、聖霊の 「油 」が彼らの肉体のランプから失われ、「救いの信仰 」から後戻りすることになります。

(ローマ 13 章 11 節 b)：「 というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」
ローマ書は、神に選ばれた民であるクリスチャンに、神が私たちを天国まで守ってくださるという確信を持つよう勧めています。 しかし、パウロは同じ書簡の中で、キリスト教が終末の宗教であること、すなわち「まで来ていない」であることを忘れないように、そして、「すでに」である日常生活の中で、どのように生きるべきかを強く念押ししています。19 世紀アメリカの有名な説教者、D.L.ムーディは、ある鉄道の駅で伝道活動をしている誠実なクリスチャンの少女に出会ったことがあります。 彼女は見知らぬ人々に尋ねた： あなたは救われましたか？ この神の人は彼女にこう答えた： 私は救われました、私は救われています、そして私は救われるでしょう！ D.L.ムーディーは、その真理を個人的に知っていました。
(ローマ 13 章 11 節 b)：「というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」
(ローマ 13 章 12 節)：「 12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」
すべてのクリスチャンは、預言者の態度...パウロを含むキリストの使徒たちの態度を持つために助けを求める必要があります。彼は永遠の光の中での人生を見たのです。 使徒ヨハネが(ヨハネ 1 章 3-5 節)に書いていることを、彼は知っていました：「3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」
イエスが十字架上で成し遂げたことは、罪の赦しを買うだけでなく、闇の王子の生命を脅かす力を取り除くことでした。
(ヘブル 2 章 14 節)：「14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、」

(ヨハネ 1 章 5 節)：「... 5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」私は（ヨハネ 1.5/AMPC）の増幅版の解釈が好きです：「光は闇の中で輝いている。闇は決してそれを圧倒することができないからである[それを消し去り、吸収し、流用し、それを受け入れない]。
クリスチャンは、イエスがこの地上を歩まれた時、十字架の上においても、悪魔の暗闇の力に圧倒されなかった光、イエスの力に確信を持ち続ける必要があります。 私たちは、聖書に語られているように、終末の時代における悪魔の活動にもかかわらず、輝き続けるだろう。
(ローマ 13 章 12 節)にあるように:「12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」

多くのクリスチャンは、「この書の結末を知っているから」、今日の世界における悪魔の働きについて心配することはないと言っていますが、それは正しいです。 それは、ヨハネの黙

示録の（黙示録 20 章 10 節）を指しています。 そして、彼らを惑わした悪魔は、獣と偽預言者とがいる火と硫黄の池に投げ込まれ、昼も夜も永遠に苦しめられる。 これが正しい終末思想、*聖書終末論です。*

しかし、OIC の聖徒の皆さん、あなたの本の最終章、つまり地上でのあなたの人生の本に対して、同じような確信を持っていますか？ イエスは今日ここにおられ、聖霊が、あなたの人生において、特に地上におけるその最終章において、死と悪魔の闇に打ち勝つイエスの光に対する個人的な確信をあなたに与えることを望んでおられます。

(ローマ 13 章 12 節 b)：「ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」神は私たちに御霊を与えてくださったので、信仰を持つだけでなく、信仰の行いをするよう求めておられます！ ...そして、悪魔と戦うための神の武具も。これは、悪魔と戦い続ける神の軍隊の兵士の祈りであり、戦争へのラッパが鳴り止むまでの祈りです！ 私たちクリスチャンは、この祈りの活動を（**エペソ 6 章 10-12 節**）で教えられています：「10 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

悪魔は敗北した敵だと言うクリスチャンを知っています！ 彼のことは心配しなくていいのです。 しかし、戦うのです！戦うためには、私たち自身の肉欲の鎧ではなく、神の鎧が必要なのだです！ 4 月 21 日の十字架についてのメッセージで私が説いたように、イエスのかかとが十字架上で悪魔に打ち砕かれました。パウロは、イエスを信じる者たちが、勝利のために必要でない祈りをしてはいけないと教えているのではないのです。 私はすべてのクリスチャンに、エペソ人への手紙 6 章にある「神の武具」をよく復習するように勧めています： 真理」、「義」、「福音を伝える備え」、「信仰」、「救いの兜」、そして神の言葉である聖霊の剣です。

(ローマ 13 章 13-14 節)：「 13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。14 主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」
私たちは光であるキリスト・イエスの中にいます。 私たちには神の御霊があり、この暗い世界で、あたかも 「その日 」に主がすでに戻ってこられたかのように、聖なる生活を送ることができます。

そして、パウロはいくつかの罪深い継続的な行動を挙げています：酩酊、性的乱交｛結婚以外の性的快楽｝、官能｛目の欲望、一時的な快楽を楽しむことに執着する｝、争い｛他人を愛さない｝、嫉妬｛他人が持っているものを欲しがり、自分への神の賜物に不満を持つ｝。罪は神にとって決して許されるものではないし、どんなクリスチャンにとっても許されるべきものではないのです。 しかし、一つの罪に陥るだけでなく、列挙されたものは「生き方」

であるため、私は継続的という形容詞を付け加えました。 *私たちは、その日のように正しくふるまいましょう。*

（14 節）「 主イエス・キリストを着なさい。」　これには、悪魔とその使いたちに対する戦いのための神の武具を着て祈ることも含まれますが、神があなたの心の望みに答えてくださり、あなたが日ごとに御子イエスのようになるように祈ることも含まれています。続けて 14 節、「肉の欲のために、肉を備えてはならない」。 悪魔は時々、私たちの行く手に誘惑を仕掛けてきます。 それを防ぐことはできません。神は、こうした誘惑の一つひとつに逃げ道を用意してくださると約束されています。
（1 コリント 10 章 13 節）：「 13 あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」しかし、私たちは時として、神の誠実さに対して傲慢になり、そのような誘惑を招くようなことをしてしまいます。これは肉のための準備である。
私たちが読む本、見る雑誌、見る映画、付き合う友人などは、*肉の欲望に関して私たちが肉のために備えていることになります。*

さて、パウロはクリスチャンに、非常に難しいが極めて重要な良心の原則をいくつか教えています。 **（ローマ 14 章 1-3 節）**を読みます：「1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。3 食べる人は食べない人を侮ってはいけないし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。」
1 世紀におけるこの懸念の源は、「異教の神殿で偶像に動物を生け贄に捧げ、その肉を食品市場で売る 」という一般的な異教の活動でした。 本当は、神殿での活動は悪魔を礼拝しているのです。 しかしパウロは、悪魔が動物やその肉を所有しているとは言っていません。
パウロはローマへの手紙よりも数年前に、コリントでこのことを詳しく扱っていました。
（1 コリント 8 章 4-7 節）：「4 そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることについてですが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。5 なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。7 しかし、すべての人にこの知識があるのではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんで来たため偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのです。」
パウロはここで（5 節）、たとえ動物であっても肉は神のものであり、イエスを通して地上の人間にもたらされたのだと言っています。しかし、すべての人がこの知識を持っているわけではないので、私たちはキリストにある兄弟を大切にしなければなりません。 もしクリス

チャンが、その肉がイエスを通して神からもたらされたものであり、イエスのものであるということを頭で理解していても、そのことで良心が痛むのであれば、その良心に従って食べてはなりません。

(1 コリント　8 章 7 節)：「弱い良心が汚れる」クリスチャンになりたての頃、フェローシップの指導者である 「成熟した 」クリスチャンが、私の良心の弱さを侮辱したことを覚えている。彼は事実としては正しかったが、精神的には正しくなかった。 イエスにあって成熟するにつれて、私はもはや自分の良心がどれほど弱いか、あるいは弱かったかを気にしなくなった！ ダビデ王が **(詩篇 18 篇 1 節)** で歌ったように、弱いことは恥ではない。「1 彼はこう言った。主、わが力。私は、あなたを慕います。」

さて、コリントからローマの同様の話題に戻りましょう：(ローマ 14 章 3- 4 節)：「 3 食べる人は食べない人を侮ってはいけないし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。4 あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」

教訓　その 1

クリスチャンになって 1 年目の私の恩師は、いろいろな意味で 「成熟 」していましたが、若い信者が自分の良心と神の指示を知ろうと葛藤することについては未熟でした。 主は彼を立たせることができます。神はそうされました！神の聖なる御名をたたえよ！ **しかし、若い信者たちに言っておきます。彼が教えてくれたことの多くは正しく、私が主にあって成長する助けとなりました。 私は彼の教えをすべて否定したわけではなかったが、とても傷つきました。　後年、神が私の良心に反すると示された活動に身を任せたことで、神が私を懲らしめられました。 そのとき私は、初期の恩師が「弱い」良心を持つ若いクリスチャンを憐れむという精神を、いかに見落としていたかを思い知りました。 聖徒の皆さん、良心がまったくないよりは、「弱い」方がよいのです。**

(ローマ 14 章 5-9 節)：「 5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」

パウロは、生まれながらのユダヤ人たちに対して、自分たちの宗教的な祝日や習慣を祝うのを止めろとは言いませんでした。 これらのほとんどは、旧約聖書の聖典から直接引用したも

のです。 パウロ自身、伝道旅行中に次のような誓いを立てています。
（使徒 18 章 18 節）：「18 パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリヤへ向けて出帆した。プリスキラとアクラも同行した。パウロは一つの誓願を立てていたので、ケンクレヤで髪をそった。」

（ローマ 14 章 7 節）パウロは書きました:「 7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。 」これが私たちの自由の鍵であり、他のクリスチャンの良心的な選択と宗教的習慣を尊重する義務です。 私たちは自分のために生きるのではなく、私たちのイエスのために生きるのです。 生と死は、私たちの選択やコントロールの下にはありません。 もし私たちが心からイエスのために生きるなら、同じようにイエスのために死ぬと私は確信しています。 有名な伝道者の言葉を思い出します：「クリスチャンは皆、天国に行きたいと思っているが、死にたいと思っている人はいない。」 さて、ローマ人への手紙の上の聖句は、神が私たちをイエスのために生きさせるだけでなく、イエスのために死なせることを暗示しています。 今日私が言ったように、あなたの人生という本の最終章は、あなたではなく、主にかかっているのです。 主は信頼に値する方なのです！
（ローマ 14 章 10-12 節）：「10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。11 次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」
信仰における良心的な選択のために兄弟を裁くことは 「罪 」です。 クリスチャンを侮蔑する気持ちは、聖霊がこの恐ろしい思考生活を私たちに確信させてくださるので、私たち全員がただちに祈りの中で十字架に釘付けにしなければなりません。私たちクリスチャンは皆、裁きを受けるためにイエスの前に立つことになるが、それは約束された将来、イエスを永遠に見、イエスとともにいるためではなく、天国への入場のためでもなく、地上でのクリスチャン生活に対する報いのためです。 私たちがキリストのもとに来てからの 「私たちの人生の映画 」を神が見せてくださるので、私たちは皆、「涙を流す 」だろう。 キリストを受け入れる前の私たちの罪深い映画の一部は消去され、神の忘却の海にあります！

（ローマ 14 章 13 - 15 節）：「 13 ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。」14 主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたものなのです。15 もし、食べ物のことで、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているのではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のことで、滅ぼさないでください。」

4 月 28 日のメッセージでは、「義認」と題した： パウロは次のように書いています。（ローマ 12 章 10 節）：「10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」この説は（**ローマ 14 章 13 節**）と一致しています。：「兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。」キリストにおける自由の権利を要求する」のは簡単です。 しかしそれは、キリストにある兄弟姉妹を傷つけることを犠牲にしてはならなりません。私たちの義認の賜物を思い起こすことは重要です。もし私たちが神に対して権利を要求していたら、すべての人が受けるべきものを受けていたでしょう。地獄です！ しかし、神は私たちに慈悲と恩寵の賜物を与えてくださったのです。だから兄弟愛は、互いに名誉を優先させます。 （**ローマ 14 章 14 節**）：「14 主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたものなのです。」つまり、他のクリスチャンの良心的な選択を尊重することは、そのクリスチャンに名誉を与え、神に喜ばれることです。

（**ローマ 14 章 15 節**）：「15 もし、食べ物のことで、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているのではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のことで、滅ぼさないでください。」

（**ローマ 14 章 23 節**）： クリスチャンの良心はここにあります：「23 しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。」 **この 「何であれ 」というのは、聖霊の霊感を受けたこれらの教えを、人生におけるすべての活動に適用することです。 この 「何であれ 」とは、個人的な生活や宗教的実践、人々や政府との関係です。（ローマ 14 章 15 節 b）**：「 キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のことで、滅ぼさないでください。」ですから、もし 「強い 」クリスチャンが他のクリスチャンをその人の良心を悩ますような行為に追い込み、それが続くなら、弱いクリスチャンは信仰から退くことになります。 「破壊」とは、霊的に破壊されることであり、その人は地獄で滅びます。

（**ローマ 14 章 16 節**）：「 16 ですから、あなたがたが良いとしている事がらによって、そしられないようにしなさい。」キリストにあって自由を行使するためには、現在の聴衆を意識することが重要です。 私たちが行う良いことも、聴衆を間違えれば、悪として語られることになります。

（**ローマ 14 章 17 節**）：「17 なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」 聖霊はグノーシス主義の精神でもなければ、すべての物質的なものを悪と呼んだり、すべての享楽を罪と呼んだりするものでもありません。 聖書は、キリストが来られる前に神について真実であったことは、ダビデが書いたように、今も真実であることを明らかにしています、 （**詩篇 16 篇 11 節**）：「11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」

（ローマ人への手紙）や聖書全体の教えは、信者の行動が神や神の民との関係に深く関わっていることを強調しています。 イエスとの親密な関係に関心を持っている、あるいは真剣に考えているクリスチャンは、イエスが彼らにいのちの道を知らせてくださることに心を開くでしょう。それはまた、歩んではならない死の道を知らせることも意味します。

(ローマ 14 章 17 節)：「17 なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」ローマ人への手紙のこれらの章の多くは、クリスチャンが何を食べ、何を飲み、何を祝うかについて、自由にしています。 「神の国」とは、何を食べたり飲んだりするかではなく、何を食べたり飲んだりしないかでもないのです。 しかしパウロは、神の国においてイエス・キリストとともに永遠を生きることを指し示しています。 神の国は今、聖霊によって私たちの心の中にあります。 肉体を持たなくなったとき、私たちはイエスに会えます。 私たちはもう食べたり飲んだりする必要がなくなりますが、天国では食べたり飲んだりします。 イエスが裏切られ、逮捕された晩の最後の晩餐以来、イエスは過越の食事を断食しています！
そして**(ルカ 22 章 14-16 節)**：「 14 さて時間になって、イエスは食卓に着かれ、使徒たちもイエスといっしょに席に着いた。15 イエスは言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をすることをどんなに望んでいたことか。16 あなたがたに言いますが、過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません。」

クリスチャンは今、神の国の義と平和と聖霊による喜びを、大きなコップの液体を飲むように味わっています。 彼らがイエスを見るとき、私の好きな賛美の歌にあるように、「言葉にできない喜び、栄光に満ちた喜び 」を得ます。　 終末論、義認、その他の素晴らしい言葉を使って私の脳を働かせているうちに、私はイエスからの、次のような教えを思い起こしました。　　**(ルカ 18 章 17 節)**：「 17 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」そこで、牧師の祈りの前に、私たちの心をイエスとともにある神の国へと導く、天国についての短いキッズ・ソングを 2 曲お見せします。

祈りましょう！

REFERENCES

AMPC - Amplified Bible Classic, Copyright © 1954, 1958, 1962, 1964, 1965, 1987 by The Lockman Foundation, La Habra, CA 90631. All rights reserved.

NASB1995 - New American Standard Bible®, Copyright © 1960, 1971, 1977, 1995, 2020 by The Lockman Foundation. All rights reserved.